

Title	技術情報システムの活用に関する一考察 - F社の事例を中心として -
Sub Title	
Author	成瀬勝彦 柳原一夫
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1989
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1989年度経営学 第705号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001989-0705

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名 成瀬 勝彦 主査 柳原 一夫
(富士ゼロックス株式会社) 副査 小野 桂之介
所属ゼミナール 柳原 一夫 研 古川 公成

技術情報システムの活用に関する一考察 — F社の事例を中心として —

ユーザーニーズの多様化、企業競争の激化、そして国際市場での貿易摩擦などの厳しい状況下で、製造業に要求されることは、①開発期間の短縮、②ユーザーの好みに応じた品揃え、③品質の向上が挙げられる。これらを実現する手段として、計算機支援設計(Computer Aided Design=CAD)システムをはじめとするさまざまなEDPSが発達してきた。しかし、現状のCADシステムは、品質の向上には貢献しているものの、省力化や合理化には貢献していないという評価を受けている。この問題に原因は、①CADシステム自体の欠点と、②省力化・合理化の度合を測定する方法がないという二面的なものであると考えた。

一方、製造業の製品開発活動において物を作ることと同等に重要なことは、技術情報を蓄積し、活用していくことである。特に、製品開発手順の早期段階において、情報を有効に活用することができれば、それは戦略的情報システムと呼べるものにまで高められる。この情報の消費能力を高めるためには、定期的に処理し得る業務(=基礎的業務)を確実に機械化、合理化していくことが必要である。さらに、効率を追求する業務(=管理的業務)や、効果的な情報を作成することが必要な業務(=戦略的業務)の質を高めていく。

F社でのCADシステム導入前後での製品開発工数を分析・比較することによって、CADシステムが“基礎的業務”の合理化、省力化は達成しているものの、他の情報システムとのつながりが弱いため“管理的業務”や“戦略的業務”にまで関わってはいないということがわかった。

CADシステム、CIM双方の歴史的変遷を調査した結果を見ても設計・開発部門やその他の各部門個別の効率化を進める時代は終わり、部門間の連携や設計者の意識改革が重要であり、それに適した全社体制作りが必要である時期に達している。戦略的情報システムを意識した技術情報システムの構築が重要である。